

小袖曾我

シテ 曾我十郎祐成

ツレ 曾我五郎時致

トモ二人 団三郎、鬼王

狂言 春日局

母 兄弟の母

地は 伊豆

季は 五月

四人次第

「命牡鹿の隠里。く。富士の裾野を狩らうよ。

シテ詞

「是は曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候ふあひだ。我等も罷り出で候。また是なる時致は。母にて候ふ者の勘当にて候ふ程に。申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候。

四人サシ

「時しも頃は建久四年。五月半の富士の雪。五月雨雲に降り交ぜて。鹿の子まだらや村山の。裾野の鹿の星月夜。鎌倉殿の御狩の御遊。げにたぐひな

き御事かな。

シテ

「東八箇国の兵ども。皆御供に参るなれば。

四人

「定めて敵の祐経も。御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの。事は夏野の鹿なりとも。ねらひて見ばやと大丈夫の。狩人にまぎれ打ち出づる。

下歌

「人知れぬ大内山の山守も。

上歌

「木隠れて。それとは見えじ梓弓。く。矢頃に
ならば鹿よりも。祐経を射とめて。名を富士の

嶺に揚げばやと。思ひ立ちぬる狩衣。たとへば君
の御咎め。よしそれとても数ならぬ。身にはなか
く恐れなし。く。

シテ詞

「是に暫く御待ち候へ。某まゐりて案内を申さうず
るにて候。如何に案内申し候。

狂言

「誰にて御座候ふぞ。や。祐成の御参りにて候。

シテ

「さん候某が参りたる由申し候へ。

狂言

「畏つて候。大方殿よりの御淀には。祐成の御参り

ならば申せ。時致の御参りならばな申しそと仰せ
出だされて候。

シテ

「唯某がまゐりたると申し候へ。

狂言

「いかに申し上げ候。祐成の御参りにて候。

母詞

「此方へと申し候へ。あら珍しや十郎殿。いづくへ
の序ぞや。母がために態とはよも。

シテ

「さん候久しく参らず候ふ程に向顔のため。又は富
士の御狩と申し候ふ程に。

母 「さればこそ思ひし事よ君がため。御狩に出づる序ぞや。

シテ 「いつしか親子の御戯れ。珍し顔に羨ましやと。

時致 「思ひながらも時致は。不孝の身なれば物の隙より。

地 「高間の山の峰の雲。よそにのみ見てや止みなん。

同じ子に。同じはゝそのもり乳母。く。隔なくこそ育てしに。さも引きかへて祐成には。いろくの御もてなし。御祝言の御盃。たとへば時致

は。後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて。御おぼえ葦垣の。隔てあるこそ悲しけれ。シテ詞 「日本一の御機嫌にて候。あれへ御参りあつて。春日の局をもつて申され候へ。

時致詞 「某が事は御機嫌いかゞはかりがたく候ふあひだ。先々まるり候ふまじ。

シテ 「唯某に御まかせあつて。急いで御参り候へ。

時致 「如何に春日の局。時致が参りたる由それく申し

候へ。いつしか守乳母まで。心変りし春日野の。
飛火の野守。出でゝだに見候はぬぞや。

詞

「時致が参りたる由それく申し候へ。

母詞

「あら不思議や。祐成は只今きたりぬ。九上の禅師
は寺にあり。それならで子はなきに。時致といふ
は誰ぞ。や。今思ひ出だしたり。箱根の寺に有り
し箱王と云ひしえせ者か。それならば母が出家に
なれと申しゝを聞かざりしほどに勘当せしに。押

時致

して是まで来れるは。猶かさねての勘当とや。伊
豆箱根富士権現も御覧ぜよ。なほ此後も勘当と。
「御誓言に蒨遣戸を。

地

「立て添へられて茫然と。やるかたもなき此身かな。
うたてやせめて今一目。御簾几帳も下りたり。あ
ら情なの御事や。

シテ

「祐成は。かくとも知らで時致が。時移りたり事よ
きかと。中門を見やりつゝ。早こなたへと招けば。

時致 「招かれて山のかせき。

地 「泣くく来りたり。打たれても親の杖。なつかしければ去りやらず。く。

シテ詞 「さて御機嫌は何と御座候ふぞ。

時致詞 「以ての外の御機嫌にて。猶かさねての御勘当と仰せ出だされて候。

母詞 「如何に誰かある。

狂言詞 「御前に候。

母 「時致が事を申さば。祐成ともに勘当と申し候へ。

狂言 「畏つて候。いかに申し候。時致の御事を御申しあらば。祐成ともに御勘当と仰せ出だされて候。

シテ詞 「まづ畏つたと申し候へ。某存ずる子細の候ふあひだ。此たびは同心にて申さうずるにて候。

時致詞 「いやく某はまるり候ふまじ。

シテ 「唯御参り候へ。いかに申し候。我等が親の敵の事。世に隠れなく候ふところに。余りに便なく候ふあ

ひだ。時致がことを申し直し。連れて御狩りに出
づべき所に。時致が事を申さば。祐成共に御勘当
と候ふや。よく／＼是を案じ見るに。

クリ「総じて祐成をも誠は思ひ給はぬぞや。

地「たとひ時致出家の暇を申すとも。兄祐成に郎等も
なし。しかも身に思ひあり。おのれらさへに見捨
つるか。却つて御叱り候ひてこそ。慈悲の母と
も申すべけれ。

シテサシ

「それに時致を法師にならぬとの御勘当。たとひ仰
せに従ひ。出家仕り候ふとも。

地

「我等が事は世に隠れなし。あれ見よ河津が子供こ
そ。敵を遁れんとの出家。正しく弘法のためなら
ずと。同宿も思ひ賤しまば。心も染まぬ墨衣の。
浦島が子の箱根寺にて。明暮くやしと思ふならば。
中々俗には劣るべし。

クセ

「時致は。箱根に有りししるしに。法華經一部読み

覚え。常は読誦し母上の。現世安穩。後生善所
と祈念する。又は毎日に。六万返の念仏。父河津
殿に廻向する。かほどに他念なき身を。此三年不
孝蒙る。恩顔を拝せねば。御恋しさも一つ。又は
狩場への門出。御暇恋しさ。一方ならぬ望みなり。
大かた治まる御代なれども。狩場や漁に。不慮の
争ひある物を。

シテ
「其上我等は。狩場において例悪し。」

地
「昔を思ひ伊豆の奥の。赤沢山のかりくらにて。父
も失せさせ給はずや。今とても。狩場とあらばな
どしも。御心にも懸けざると。恨み顔にも兄弟は。
泣く泣く立つて出でければ。」

母
「母は声をあげ。あれ留め給へ人々よ。
地
「不孝をも勘当をも。ゆるすぞく時致とて。泣く
く出でさせ給へば。」

兄弟二人
「兄弟は嬉し泣きに。伏しまろべばや。」

地 「見る人も思ひやりて。泣き居たりや。

母詞 「祐成申すによつて。時致が勘当ゆるすにてあるぞ。

近うきたりて。狩場への門出いはひて御入り候へ。

シテ詞

「如何に時致近う参りて。この年月の御物語り申し候へさるにても。

地

「此ほど時致が。尽す心に引きかへて。今はいつしか思子の。母の情有難や。あまりの嬉しさに祐成。御酌に立ちてとりぐ。時致と共に祝言の。

地

「歌ふ声。

兄弟二人

「高き名を。雲井に揚げて富士の根の。

地

「雪をめぐらす舞のかざし。 (二人男舞)

地

「舞のかざしの其ひまに。く。兄弟目を引き。こ

れやかぎりの親子の契りと。思へば涙も尽せぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。たがひに思ふ嗔恚の焰。胸のけぶり

を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終に
は其名を留めなば兄弟。親孝行の。例しにならん
嬉しさよ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著